NEWS 2002.4〜2002.6

音楽環境創造科の目指すもの

音楽部に設置された50年ぶりの新学科

渡辺健二

音楽学部に音楽環境創造科が設置された。音楽学部にとって新学科は実に五十年ぶりの事となる。ただし、取手校地に新設されたため、まだ校舎がない。美術学部の校舎を借りて授業を行っている。

音楽環境創造科とは、新しい音楽芸術のあり方を探求し、音や音楽とそれを取り巻く環境を考察し創造する学科である。

音楽学部は開学以来、音楽界を担う優れた人材を輩出してきたが、その一方では一五〇〇以上ある公共ホールが充分に活用されていないという現実がある。文化的・芸術的環境は放っておいて育つものではない。そのためには優れた聴衆が必要であり、優れた聴衆を育てるためには、優れた芸術教育と、芸術と社会を結びつける人材育成が不可欠である。また、音楽芸術という定義すら曖昧になってきている現在、映像や身体表現と結び付いた新しい音楽芸術の可能性を芸大として看過するわけにはいかない。

こうした観点から音楽環境創造科が設置されたわけであるが、ここでは、新しい音楽芸術創造、音や音楽を取り巻く環境の考察・創造という目的のために、芸術や社会について様々な観点からアプローチ出来るようなカリキュラムが考えられている。

一部では「実技」が出来なくても芸大に入れるという点がクローズアップされたようだが、「実技」の能力を第一義の資格としないというだけで、学力、独創性、創造性、論理性、企画力、コミュニケーション能力など、総合的に厳しくチェックさせてもらった。

既存の各科はこれまで以上にアカデミックな伝統芸術を継承し、そのための技能をますます錬磨していく。音楽環境創造科はそれを、ある時は側面からサポートし、ある時は火を投げ込み、お互いが刺激しあって、芸大を活性化させていかなければならない。

最後に新任の専任教官のコメントを載せておく。

「〈つくり手のたまご〉と〈つなぎ手のたまご〉が一緒に孵化する場、というのはとてもスリリングな挑戦です。音や音楽のこれからのあり方を探り、新たな音環境や新たな〈受け手〉を創出してゆくには、社会の変化に敏感に反応するセンスをもったつくり手が必要ですし、創造の本質を熟知しつつ潜在的なニーズを掘り起こすつなぎ手が不可欠です。現代美術の分野では、社会とアートの関係を刷新し、アートマネジメントの新しい境地を拓いているのは多くのアーティストたちです。音楽の分野でもこれか

交流

◆芸術国際交流協定の締結

○英国サリー・インスティチュート・オブ・アート・アンド・デザイン大学との締結

五月十三日、サリー美術大学からエイレン・トーマス学長、イアン・デュームロウデザイン学部長等が、本学からは平山学長、宮田美術学部長等が出席し、本学において大学間国際交流協定の調印式が行われた。

同大学は一八六六年設立のファーナム・アート・カレッジを母体とし、デザイン学部など三学部・大学院を有している。

今回の調印により、本学の交流協定締結校（大学姉妹校）は、八カ国十五大学となった。

◆外国人留学生懇談会を開催

五月二十日、大学美術館内学生食堂において、留学生と学長、学部長をはじめとする関係教職員、チューターとの交流を通じ相互理解を深めることを目的とした懇談会を開催した。学長挨拶の後、八七名の留学生を代表して丁熹均（美術：博士後期課程三年、韓国）さんが謝辞を述べた。また、今回初めて奨学金支給団体からも参加していただき、盛会のうちに終了した。

◆四芸祭、芸大は総合優勝

第四十八回四芸術大学体育・文化交換会が五月二十三日から二十六日まで、愛知県立芸術大学において行われた。バレーボールを始めとする八種目の競技会では毎日熱戦が繰り広げられ、本学は三種目で一位となるなど、二年連続総合優勝を飾った。

◆別府アルゲリッチ音楽祭に特別オーケストラを派遣

第四回別府アルゲリッチ音楽祭が四月二十六日から二十九日まであり、招請を受けた音楽学部が学生を主体とした特別編成のオーケストラを派遣した。シャルル・デュトワなどの指揮のもと、演奏会を成功裏に導いた。

©TAKEO ISHIMATSU

◆初の邦楽総合アンサンブル「熊野の物語」終始聴衆を魅了

五月三日、演奏芸術センター企画、邦楽各ジャンル参加による「熊野（ゆや）の物語」が美術学部の協力も得て開催された。本学始まって以来のユニークな企画に対し、会場はほぼ満席状態となり、約一時間三〇分にわたって、終始聴衆を魅了し、感動のうちに演奏会は終了した。

受章・受賞

◆増村紀一郎教授紫綬褒章受章

平成十四年春の褒章において、増村紀一郎教授（漆芸）が紫綬褒章を受章された。

らさまざまな実験が立ち上がってくると思います。そうした試みのイニシアティブを握っていくような人材は、つくり手であり同時につなぎ手である可能性も高いのです。

三〇〇人を超える志願者のなかから栄えある第一期生となった二〇人は、年齢やバックグラウンドもさまざまな個性派ぞろいです。音楽環境創造科の教育環境のほうはまだまだ発展途上の段階ですが、パワフルな彼ら／彼女らなら逞しく学んでくれると信じています。快く新校舎を提供してくださった先端芸術表現科の先輩たちや取手でともに学ぶ美術学部のみなさん、上野でともに学ぶ音楽学部のみなさんと、刺激に満ちた交流が始まることを期待しています」（熊倉純子）

「音楽環境創造科の中心になる科目は〈プロジェクト〉と呼ばれ、複数の教官、学生による実践活動の場です。音楽の表現は、録音や放送技術の発達、さらにコンピュータによる音声のデジタル処理やネットワークで飛躍的に拡大されました。そこでは、従来の音楽の枠にはまりきらない、新しいコミュニケーションの可能性があります。〈プロジェクト〉では、このような新しい領域の研究や作品の制作、さらに地域社会との連携などが計画されています。

芸大が持つ人材、設備、教育システムは、新学科にとってももちろん大きな財産です。先日、奏楽堂で公演された『熊野（ゆや）の物語』は実に刺激的な催しでした。

このような企画に音楽環境創造科の学生達が〈プロジェクト〉として直接関わり、実践のなかでたくさんのことを学んでくれればと思います。学外の研究施設や音楽スタジオ、放送局との共同制作だけでなく、芸大のなかの学部や学科を越えたさまざまな交流を通じて、新学科の可能性を試していきたいと思います」（西岡龍彦）

（わたなべ・けんじ／音楽環境創造科開設準備室・器楽科助教授）

取手校地「メディア教育棟」を利用した音楽環境創造科の講義風景

運営

◆平成十四年度入学式を挙行

四月十日に学部、大学院、四月二十六日には本年度新しく設置された音楽学部音楽環境創造科の入学式がそれぞれ奏楽堂において挙行された。入学の歓びを胸に新入生、父兄等が多数参列した中、学長から新入生に対して入学許可の告知があり、引き続き式辞が述べられた。当日は、学内各所で在校生による歓迎演奏やクラブ勧誘等、にぎやかに新入生歓迎祭が実施された。また、四月九日には音楽学部附属音楽高等学校の入学式が高校内ホールにおいて行われた。

◆大学美術館新館長は竹内順一教授

任期満了に伴う大学美術館長選出選挙が一月十日に行われ、四月一日、竹内順一教授が新館長に就任した。任期は二年間。

◆音楽学部長は高橋大海学部長が再任

三月十二日に任期満了に伴う音楽学部長選挙が行われ、高橋大海学部長が選出された。高橋学部長は平成十二年四月から学部長となり、今回は再任。任期は四月一日から一年間。

◆美術、音楽学部選出評議員決まる

四月一日、美術学部堀口光彦教授、音楽学部川井学教授が新たに評議員となった。また、美術学部は大藪雅孝教授、中林忠良教授が、音楽学部は村井祐児教授、岡山潔教授が再任。任期は二年間。

他の評議会構成員は大学ホームページの「大学案内―大学概要―評議員名簿」をご覧ください。

大学公式ホームページ
http://www.geidai.ac.jp

◆名誉教授称号授与式を実施

五月七日、学長室において、名誉教授称号授与式が行われ、多年にわたり本学の教育・研究活動に多大な貢献をされ、本年三月に退職された次の八名の方に対し、東京芸術大学名誉教授の称号が授与された。当日は、原正樹氏が都合により欠席し七名での式典となったが、平山学長から各氏に名誉教授の称号が授与され、式典終了後、記念撮影と懇談会が行われた。

坂本一道、原正樹（欠席）、望月積、小松敏明、歌田眞介の各氏（以上、前美術学部教授）

南弘明、山岡耕筰、上参郷祐康の各氏（以上、前音楽学部教授）

◆「メディア教育棟」竣工・音楽環境創造科設置記念式典を実施

六月二十日に、取手校地（茨城県取手市）のメディア教育棟竣工・音楽環境創造科設置記念式典が行われた。

メディア教育棟は、鉄筋コンクリート地上五階建て、総延べ床面積五五〇五㎡。美術学部先端芸術表現科、音楽学部音楽環境創造科の教官室や教室、附属図書館分室などがある。